

## 「復活についての問答」

2022年04月28日

「さて、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが、子を残さないで死にました。次男が彼女を妻にしましたが、子を残さないで死に、三男も同様でした。こうして、七人とも子を残しませんでした。最後にその女も死にました。復活の時、彼らが復活すると、彼女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」(マルコ福音書 12章 20節～23節)

『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」(マルコ福音書 12章 26節 b～17節 a)

日ごろは犬猿の中であったファリサイ派とヘロデ党の者たちが一緒になって、主イエスをやり込められる自信をもって問いかけたが、自分たちの下心を見透かされ、驚愕し、退散した。次に、復活はないと主張していたサドカイ派の人々が、論争を仕掛けてきた。サドカイ派は、エルサレム神殿の祭儀を司る祭司たちで、貴族階級に属し、政治的にはローマ支配を容認していた。ファリサイ派は律法を解釈し、民衆に向き合った宗教教育をしていたので、復活を信じる信仰を勧めていた。サドカイ派は、「モーセ五書」に立脚し、その字句に拘泥し、「父祖の言い伝え」などは認めず、死人の復活などはないとする教義を堅持していた。彼らは天使の存在も否定し、現実主義的な教義と立ち位置であった。

そのサドカイ派の人々が、主イエスに、「さて、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが、子を残さないで死にました。次男が彼女を妻にしましたが、子を残さないで死に、三男も同様でした。こうして、七人とも子を残しませんでした。最後にその女も死にました。復活の時、彼らが復活すると、彼女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです」と問いかけた。これは、家族制度を守る「レビレート婚」を背景にしている。長男が結婚し、子どもがなく、死んだ場合、次男が兄嫁と結婚し、生まれた子どもは兄の子として認知する。家名を継承させるための律法であるが、反面、やもめを守るものでもあったのではないか。7人もの兄弟が、レビレート婚によって、一人の女を妻としたが、子どもがなく、皆死んでしまった。復活したら、女は誰の妻になるのか。サドカイ派の人々は、このような混乱が起こるから、復活はあり得ないと言っている訳である。

この問いに対し、主イエスはまず、「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをいっているのではないか。死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともない。天の御使いのようになるのだ」と答えておられる。あなたがたは、聖書の言葉も神の力も知らないから、とんでもない論を引き出してくる。聖書は復活を記し、神は死者を復活させる力を持っておられる。死者が復活した時は、人間社会の結婚のようなことはなく、天使のような存在になる。天国に行って、また、あの人と夫婦でありたいと望んでいる人には、いささか寂しい言葉かも知れない。それから主イエスは、「死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の箇所、神がモーセにどのように言われたか、読んだことがないのか。『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」と、モーセ五書に復活証言があるとされた。「アブラハムの神」と言った場合、アブラハムは死んだけれども、神の命の中に包まれ、今も生きている。神は死者の神ではなく、生者の神であって、その神は、死者を復活させる方であると説いておられる。